

# 大学英語教育学会（JACET）中部支部 2015 年度秋季定例研究会プログラム

日時：2015 年 10 月 24 日(土) 14 時 00 分～17 時 55 分

会場：中部大学名古屋キャンパス 6 階 610 室

名古屋市中区千代田 5-14-22(JR 中央本線「鶴舞」駅名大病院口(北口)下車すぐ)

開会挨拶 14 時 00 分～14 時 05 分 支部長 大森裕實(愛知県立大学)

研究発表1 14 時 05 分～14 時 35 分 司会 藤原康弘(愛知教育大学)

「外国語読解と不安の関係に関する探索的研究」

三上仁志(中部大学)・梁 志鋭(東京女学館大学)・吉川りさ(名古屋大学大学院生)

研究発表2 14 時 35 分～15 時 05 分 司会 岡戸浩子(名城大学)

「日本人大学生英語学習者におけるスペリング力と英文読解力の関係：産出課題タスクを焦点に」

吉川りさ(名古屋大学大学院生)・梁 志鋭(東京女学館大学)

研究発表3 15 時 05 分～15 時 35 分 司会 Leah Gilner(文京学院大学)

Building Confidence and Communicative Competence

Fern Sakamoto(Aichi Prefectural University)

研究会研究発表(ライティング研究会)

15 時 35 分～16 時 05 分

司会 佐藤雄大(名古屋外国語大学)

「沖縄の米軍基地移転問題をめぐる政治的発言のレトリック的分析」

木村友保(名古屋外国語大学)

休憩 16 時 05 分～16 時 20 分

講演会 16 時 20 分～17 時 50 分 司会 佐藤雄大(名古屋外国語大学)

「パフォーマンス心理学：遊びと模倣に基づく新しい発達の考え方」

茂呂雄二(筑波大学大学院)

閉会挨拶 17 時 50 分～17 時 55 分 副支部長 鈴木達也(南山大学)

懇親会 18 時 15 分～

## 発表概要

研究発表1      14時05分～14時35分      司会      藤原康弘(愛知教育大学)

「外国語読解と不安の関係に関する探索的研究」

三上仁志(中部大学)  
梁 志鋭(東京女学館大学)  
吉川りさ(名古屋大学大学院生)

外国語学習者が目標言語を読解する際に抱く不安感(外国語読解不安)は、これまで外国語の運用能力(や運用過程)にあまり影響しないものとされて来た。しかし近年では、外国語読解不安の変動そのものに多くの要因が関わっていることが指摘されている。この変動要因を明らかとすることは、今後、不安と外国語読解の関係を更に精緻にモデリングしてゆく上で重要な意味を持つ。そこで本研究では、外国語読解不安と4つの心的特性(自己効力感など)の関係を探索的に調査することとした。データ分析には、63名の日本人大学生英語学習者の質問紙調査への回答が用いられた。データ分析の結果は、外国語読解不安の変動に対する上記4つの心的特性の関与を認めるものとなった。

研究発表2      14時35分～15時05分      司会      岡戸浩子(名城大学)

「日本人大学生英語学習者におけるスペリング力と英文読解力の関係:産出課題タスクを焦点に」

吉川りさ(名古屋大学大学院生)  
梁 志鋭(東京女学館大学)

英文を理解するために、英語の正書法的、音韻的、形態的知識を駆使するスペリング力が必要となる。なぜなら、それは単語アクセスをする上で欠かせない一能力であるためである。本研究は、69名の日本人大学生英語学習者のスペリング力と読解力の関係を調査し、どのようなスペリング力が最も読解力に影響を与えるかを検証した。スペリングテストには、音声を聞きその綴りを産出するタスク(単語・疑似語)と、単語を見てその派生語あるいは屈折語を形成するタスクの計4種類を、読解力テストにはレベルの異なる時間制限付き読解問題2種類を使用した。難易度が高い読解力テストほど、派生語形成テストが影響を与える結果が得られたことから、学習者の派生語知識の発達を促す教育が有用である可能性が明らかとなった。

研究発表3      15時05分～15時35分      司会      Leah Gilner(文京学院大学)

Building Confidence and Communicative Competence

Fern Sakamoto (Aichi Prefectural University)

English education in Japan has seen significant change in the past twenty years. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) has recently implemented a number of “global” programs aimed at fostering individuals who are able to use their language skills to communicate effectively in a range of contexts.

Despite years of English education, however, many university language learners in Japan struggle to apply their linguistic knowledge in authentic communicative interactions. A lack of confidence and a tendency to focus on using “correct” language rather than achieving fluid communication can be seen as contributing factors.

This presentation will introduce a class offered through a university multilingual learning centre as part of the Japanese government’s Project for Promotion of Global Human Resource Development. The class is in its third year of operation as an extracurricular course geared towards first-grade foreign language majors. The presenter will discuss her strategies for enhancing students’ communicative abilities by reducing classroom anxiety, encouraging students to access and apply their existing linguistic knowledge, and challenging students to focus less on using “correct” English and more on achieving successful communication. Specific classroom methods and activities will be included.

木村友保(名古屋外国語大学)

時事英語はよく「英語の語彙を増やす」とか「時事に明るくなる」といった意義に関連づけられるが、「英語のレトリック」を学ぶためにも格好の材料を提供してくれる。特に、白黒つけがたい争点を含むニュースはそうである。今回は「沖縄の米軍基地移転」問題を取り上げる。

英語ニュースのヘッドラインを中心に、主にウェブサイトの英文記事を使いながら、この問題に関わる人々が、どのように説得し、また説得されたか、また説得されていないかを概観する。そしてそのプロセスを英文記事で追いながら、関係する人々の政治的発言を、首尾一貫性があるか、説得力があるか、現実主義的かなどレトリックの尺度で分析、解釈、評価を試みる。

## 講演会

16時20分～17時50分

### パフォーマンス心理学：遊びと模倣に基づく新しい発達の考え方

茂呂雄二(筑波大学大学院)

英語教育・外国語教育においてもヴィゴツキーの考え方が少なからず導入・参照されている。参照の仕方は多様であり、例えば学習の社会性や状況との一体的なあり方に注目するもの、学習が相互行為によって進行することから教室内でのマイクロなやり取りに着目するもの、ヴィゴツキーから派生した認知的徒弟制やスキヤホールディングの概念で学習のコミュニティを形成しようとするものなどがある。様々なトレンドのひとつに、CLIL (Content and Language Integrated Learning)系では、パフォーマンス心理学(Holzman, 2014, 『遊ぶヴィゴツキー』)に基づいた新しいヴィゴツキー像が導入されている。この発表では、パフォーマンス心理学を生み出した、ソーシャルセラピー(茂呂近刊、『成長と発達(Becoming)の心理学』)の考え方を紹介する。これは、グループ、アンサンブル、コミュニティで、新しいことばの使用、意味付け、生のあり方を生産しようとする活動であり、つまりは能力や性役割、地位役割等の現在の限界を突破する学習活動である。これは、英語の教育と学習に対して、トータルな活動や遊びと創造的模倣活動という、新しい発達の視点を提供するにちがいない。

## 講演会講師紹介

茂呂雄二(もろ ゆうじ)氏

筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻知覚・認知心理学分野教授。主な研究領域は、教育心理学、言語心理学、学習科学、文化心理学など。特に技術継承問題と学習ならびにキャリア形成の関係に関する教育心理学的研究、学習過程の分析方法としてのテキスト言説分析、学習活動の社会的文化的基盤に関する理論的研究、ヴィゴツキーの思想形成に果たしたスピノザの影響に関する歴史的研究を行ってきた。

代表的著書は『対話と知』(新曜社,1997)、『なぜ人は書くのか』(東京大学出版会, 1988)、『具体性のヴィゴツキー』(金子書房, 1999)、『実践のエスノグラフィー』(金子書房, 2001)、『遊ぶヴィゴツキー:生成の心理学へ』(Holzman (2008) *Vygotsky at Work and Play* の翻訳・新曜社, 2014)。

## 懇親会のご案内

「ほんのり家」にて、定例研究会懇親会を行います。会費は 4,000 円を予定しております。準備の都合上、参加ご希望の方は 10 月 22 日(木曜日)までに、JACET 中部ホームページよりお申し込みください。

情報交換・意見の場として、多くの方々のご参加をお待ちしております。なお、当日のキャンセルはご容赦ください。

## 事務局からのお知らせ

- ☆ 駐車場はございませんので公共交通機関をご利用下さい。
- ☆ 当日、第5回中部支部役員会(12:30～13:30)を行います。役員は同会場6階 610室にご参集下さい。

## 会場アクセス

JR 中央本線「鶴舞」駅名大病院口(北口)下車徒歩すぐ



定例研究会に関するお問い合わせは、JACET 中部支部事務局までお願いします。

支部事務局:名古屋外国語大学 佐藤雄大研究室内

t-sato@nufs.ac.jp